

京都府青少年育成協会会長奨励賞 「紙の本と電子書籍」

京田辺市立大住中学校 2年
山田陽菜



近年スマートフォンが普及したことにより増えつつある電子書籍。今まで本を読むとすれば紙の本しかなかった。紙の本を読むという文化はこれから廃れていってしまうのだろうか。

少し考えてみれば、電子書籍の便利さや、紙の本の不便さばかりが目につく。例えば、電子書籍はスマートフォンで買ってすぐ読めるのに対し、紙の本は書店まで買いに行ったり、ネットで買ったとしても届くまで待たなければならなかったりする。他にも、紙の本は電子書籍に比べると簡単に破れたり汚れたりして、読めなくなってしまうというデメリットもある。

しかし、紙の本はいまだに多くの人や多くの世代に読まれている。それにはやはり、紙の本ならではの魅力があるからなのではないだろうか。そして、その魅力は本の文化を残していくことであると私は考える。

私が考える紙の本の魅力は大きく分けて三つある。

まず一つ目として、私の本には指でページをめくったり、厚みや重みを感じたりすることの楽しさがある。分厚い本を読み切ると目に見えて達成感があるし、一枚一枚ページをめくり読み進めていくことで、先を想像してワクワクすることもできる。これらが電子書籍の場合、どんなページ数であれ、全て同じスマートフォンの厚み、重さである。だから、これらの楽しみは紙の本ならではのものだと言える。

二つ目の魅力として、紙の本はずっと手元に置いておくことができ、どこでも読むことができる。電子書籍はスマートフォンの使用が制限されている場所があったり、充電が切れた時には読めなかつたりする。しかしその点において、紙の本は問題がない。文庫本のサイズならかばんのスペースをとることもなく、紙の本の使用が制限されることもない。また、実際に自分の手に取って本を買う、読んだ後もずっと棚に置いておけるため、時間が経てば経つほど愛着がわくという人もいられるだろう。だから、紙の本には紙の本ならではの良さもあると考える。

三つ目の魅力は、特に絵本に多いのだが、紙の本だからこその仕掛けがあるということだ。ポップアップカードのように、ページをめくるととび出したり、動かしたりできる仕掛けがある。例えば『ごあいさつあそび』という絵本では、登場する動物の上半身を折り曲げると、動物がお辞儀をするという仕掛けがある。また、これは一つ目の魅力と似ているところもあるが、大型絵本は大きさ自体がおもしろく、読者の目を引く仕掛けになる。私が小さい頃に読んだ『100かいだてのいえ』を始めとする『100かいだて』シリーズは、縦の長さが幼児の体と比べるとかなり大きく、ページをめくるのも一苦労だ。だからこそ、次のページへのワクワク感も上がるだろう。紙の

本だからこその仕掛けとして、布やスポンジなど、紙以外の素材を取り入れ、五感を使って楽しめるものもある。カシヤカシヤ音が鳴ったり、こすると匂いがしたり、ふわふわな布とざらざらの紙の材質の違いを楽しめたりする。また、目が不自由な人にとっては、点字が必要不可欠であるが、紙なら点字を打つことができるので問題がない。さらに、柔らかい素材であれば、小さな子どもにも安心して与えることができる。つまり、紙の本は電子書籍と違い、嗅覚や触覚など、五感を使って楽しむことができ、誰もが安全に本を読めるという魅力があると言えるだろう。

このような紙の本ならではのたくさんの魅力は、これからも紙の本を読むという文化を残していくだろう。もちろん、最初に述べたように、電子書籍には電子書籍ならではの良いところや便利などがある。また、これからスマートフォンなどの性能が上がっていくとさらに電子書籍は便利に、親しみやすくなっていくと考えられる。

また、何十年、何百年先では、スマートフォンを超える機器が生まれ、今は想像できないような方法で本が読めるかもしれない。実際、石に文字を刻んでいた大昔の人たちにとっては、電子書籍だって「想像できないような方法」であっただろう。紙の本にも電子書籍にもそれぞれの魅力があり読まれ続ける理由があるように、新しい本の形もそのときの社会にうまく馴染んでいくと考えられる。

これから紙の本を読む文化は廃れていってしまうのか。今よりも読まれることは少なくなるかもしれないが、少なくとも完全に読まれなくなることはないと思う。これからは、電子書籍や新しい本の形と共に、紙の本も読み続けられる時代になるのではないだろうか。